

能「羽衣」普及活動の成果と課題  
—絵本を用いた古典教育の可能性を探るⅢ—

鈴木 さやか

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）  
第16巻第1号（2017年9月）抜刷

## 【研究ノート】

## 能「羽衣」普及活動の成果と課題

## —絵本を用いた古典教育の可能性を探るⅢ—

鈴木 さやか

- I はじめに
- II 研究の動機・目的
- III 能「羽衣」普及活動の概要と主な反響
- IV 「羽衣」絵本を用いた教育活動の成果と課題①（アンケート・感想から）
- V 「羽衣」絵本を用いた教育活動の成果と課題②（絵本と原典の比較から）
- VI おわりに（今後の展望）

## I はじめに

稿者は2015年3月、静岡県立大学の教員特別研究推進費（テーマ：「小学校国語教材としての「羽衣」絵本の作成—能「羽衣」を軸とした長期的総合教育モデルの構築を目指して—」）によって、能「羽衣」の絵本化に取り組んだ（『羽衣』、山階彌右衛門監修、鈴木さやか文、なかおまきこ絵、2015年3月25日発行、橋本印刷所、変型A4版、32ページ、縦書き）。また、2015-2016年度には稿者が所属する国際関係学部の教員・学生、および外部の方々の協力を仰ぎ、外国語版を制作した。同時に、2015年度には学部1年から修士1年までの学生有志12名とともに絵本による能「羽衣」普及団体（団体名：羽衣つたえ隊）を結成し、児童館や小学校、静岡市内のイベント等で読み聞かせ活動を行った。本稿は、2015から現在にいたるまでの稿者個人と羽衣つたえ隊の活動と、活動の趣旨に賛同しご協力くださった個人および団体の方々の活動の記録であり、活動を通して得られた成果と課題の報告である。以下は、IIで能「羽衣」の普及についての研究を始めた動機と、研究活動の目的を示し、IIIで約2年間にわたる活動と主な反響を紹介する。それを受けて、IV・Vでは、「羽衣」絵本へのアンケートの分析と、絵本と原典との比較作業における学生の意見をもとに、〈絵本〉を用いた古典教育の有効性を検証し、VIではIV・Vを通して見えてきた課題と、今後の展望について記したい。

本稿は、「研究ノート」と名付けるには経験の普遍化の点であまりに荒削りではあ

るが、活動の具体的な様相の報告が、「地域の伝統文化の教育・観光への活用」の一モデルとして、何らかの参考となればと願っている。

## II 研究の動機・目的

稿者が「静岡の知的文化財・「羽衣」の教育的・観光的価値の再評価」を研究テーマに据えた背景にはいくつかの動機があるが、ここでは「静岡県・静岡市の人口減少問題」と「国際関係学部の学生の嘆き」を挙げたい。

1点目の「静岡県・静岡市の人口減少問題」について、静岡県では、2007年12月の379万7千人をピークに人口減少局面を迎え、2014年10月の推計人口では369万8千人となり、ピーク時から約10万人減少しているという<sup>注10</sup>。また、静岡市は20の政令都市の中ではじめて人口が70万人を割ったが、その主な原因は進学・就職を機とした若者の他県への流出であるという分析がある<sup>注20</sup>。こうした問題に対応するためには、子育て支援や教育制度の充実、また地震対策を含む安心・安全な地域づくりなど、行政による施策が必要であるのはもちろんだが、稿者はそれに加え、「〈物語〉の共有による地元への愛着」が人口流出問題への一つの対策となり得るのではないかと考えた。〈物語〉には元々ある集団内に存在した特異な物事・人を集団内で繰り返し語り、共有していくことで絆を深めていくという役割がある。三保に住む白竜という漁夫が、異世界の住人である天女と出会い、葛藤・対立を経て七宝という恵みを授けられる「羽衣」の〈物語〉は、静岡の人々が自らの地域を代表する物語として共有し、また外部に語り出す物語として適していると思われる。

2点目の「国際関係学部の学生の嘆き」についてだが、稿者は国際関係学部に所属している関係で、これまで海外に留学した学生の感想を幾度も聞く機会に恵まれた。その際、よく聞かれる感想が、「自分の国の文化や伝統を聞かれて、何も答えられなかった」というものだ。学生は外国の文化や生活様式に惹かれて留学を志すのだが、行った先の人々が学生に聞きたがるのは、当然のことながら自国（留学先）の文化や伝統ではなく、その学生自身の国のことである。その一見自明の事柄を、留学して初めて気づくという学生は決して少なくない。自国の文化・思想・言語を知り、自分のルーツを知って初めて、その「自分」との比較を通じて海外の文化・思想・伝統をより深く学ぶことができる。如上の視点に立つとき、「信仰の対象と芸術の源泉」として世界文化遺産となった富士山と三保松原を舞台とする能「羽衣」は、静岡県立大学の学生が自国の文化として深く学び、その知識を世界に発信していくにふさわしい題材であるといえよう。

以上の見地に立ち、稿者は能「羽衣」の普及活動の教育面での目的を次の3点に定めた。

1、「羽衣」の物語、および原典である能「羽衣」の周知活動を通じ、静岡県下の子

## 能「羽衣」普及活動の成果と課題

- どもたちの地域の伝統・文化への関心を育て、ひいては地域への誇りや愛着を育む。
- 2、「羽衣」の物語を英語で読み、朗読できるようになることを通じて、英語という「伝達手段」だけでなく、英語で「伝えるに足る自国の文化」を自分の中に蓄える。
- 3、1、2の周知・教授の役割を大学生に担わせることで、学生に「実践することによる学び」を体験させ、成長を促す。

以下はこれらの目的・構想を図式化したものである。

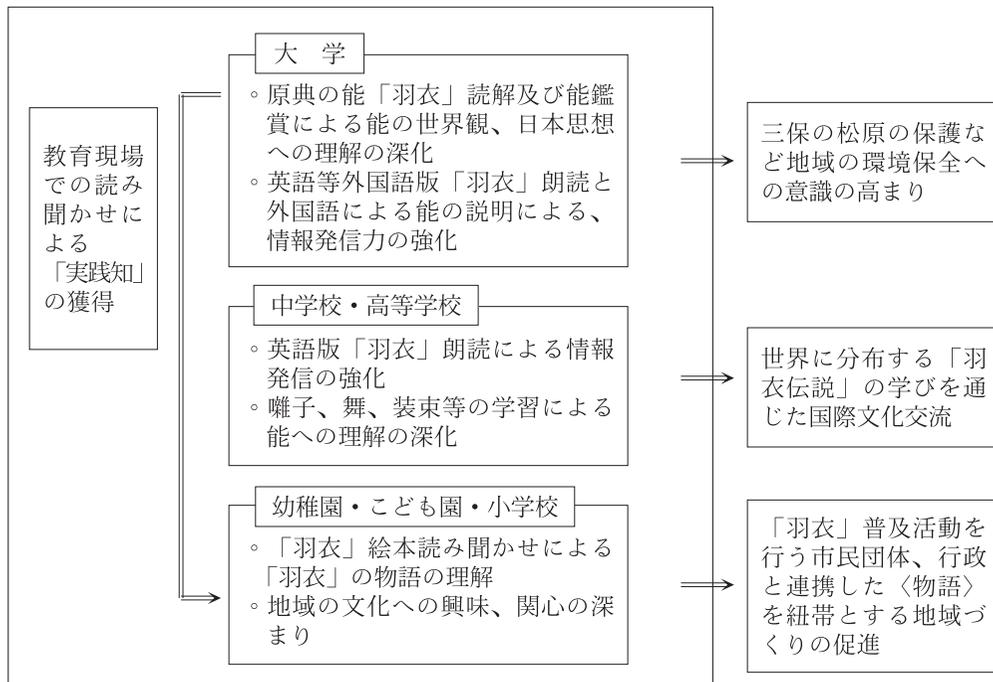


図 日本の文化を総合的に学び、適切に発信できる人材の育成

そこで次節では、これらの構想を踏まえ、2015年度から現在にいたるまで、どのような活動を行ってきたか、またその活動の反響としてどのようなものがあったかを見ていきたい。

### III 能「羽衣」普及活動の概要と主な反響

この節では2015年から現在（2017年6月）に至るまでの能「羽衣」普及活動と主な反響を見ていくが、その前にそもそも能「羽衣」はどのような物語なのか、また普及の際には物語のどこに主眼を置いて伝えているのかを確認しておく。

まず、あらすじを押さえるために、新編日本古典文学全集58『謡曲集①』（小山弘

志、佐藤健一郎校注・訳、1997年、小学館)の「羽衣」〈内容〉の項をもとに、鈴木が適宜言葉を補足したものを以下に挙げる。

早春の駿河の三保の松原で漁夫白竜は美しい衣を見つける。取って帰ろうとすると天人があらわれて、自分のものだから返してくれと頼む。漁夫は国の宝にすると行って返そうとしないが、羽衣がなくては天に帰ることができないと嘆き悲しむ天人の姿を見て、返すことにする。月の世界の一員である天人は、羽衣を着て舞を舞い、天上の様子を語って聞かせる。春の三保の松原は、あたかも極楽世界であるかのよう。天人は国土に宝を降らし、愛鷹山から富士の高嶺へと舞いあがり、やがて霞にまぎれて見えなくなる。

上記の物語内容を受け、普及活動を行うにあたり、まず「こどもたちに伝えたい物語のテーマ」を、①天の世界の清らかさ②天の世界への憧れ③三保松原の景色の素晴らしさ、の3点に定めた。次頁の表は、主な活動内容と活動への反響をまとめたものである。

本研究、すなわち絵本を用いての能「羽衣」普及活動の目的には、大きくわけて「教育面での活用」「観光面での活用」の二つがあるが、本稿では特に教育面について言及する。教育面で特筆すべきは、1、17の日本語版の制作の他、22英語版(静岡県立大学国際関係学部1-2年生4名による翻訳、ジョナサン・ディハーン氏・吉村有加氏による指導と翻訳補助)、24中国語版(黄宝珍氏翻訳)、25韓国語版(李喜羅氏翻訳)、29フランス語版(浅間哲平氏・エロディー・小山氏翻訳)の制作・刊行である。国際関係学部の強みを生かしたこれらの共同研究により、先の図に挙げた「中学校・高等学校での英語版「羽衣」朗読による情報発信力の強化」「大学での英語等外国語版「羽衣」朗読と外国語での能の説明を通じた情報発信力の強化」の目標を達成するための基礎を構築することができた。また、17英語版翻訳に学生が参加し、34・35清水港での読み聞かせを学生が行うなど、外国語版の制作・活用を通じ、学生が実践知を獲得する場を提供することができた。

また、18はごろも教育研究奨励会の協力のもと、静岡市教育委員会を通じて市内の全小学校・幼稚園・こども園に「羽衣」絵本が配布され、28静岡市文化財課の企画により「羽衣」絵本のアニメーション化が実現し、DVDが市内の全小学校に配布されたことも大きな成果であった。小学校での能「羽衣」学習環境が整った状況において、「配って終わり」にならないよう、絵本・DVDを活用した授業モデルの構築が今後の課題だと考える。

外部との連携事業については、特に16・21の静岡県文化財団(グランシップ)アウトリーチ事業・伝統芸能普及プログラムとの連携を取り上げたい。16静岡市立駒形小学校では、6年生を対象に前半は学生が「羽衣」絵本読み聞かせを担当し、後半は能

## 能「羽衣」普及活動の成果と課題

楽師の山階彌右衛門氏が実演を交えた講義を行った。また21静岡市立久能小学校では、前半に学生の読み聞かせと能「羽衣」本文についての授業、後半に山階氏の実演・講義を行った。

21の授業の中で、学生は能楽の詞章の中の「天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ、乙女の姿しばしとどまりて」という箇所と、その本歌となっている百人一首中の僧正遍照の歌「天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ乙女の姿しばしとどめむ」とを比較した。そして、後者が人間の側から天女の昇天を惜んでいるのに対し、前者は天女自身が地上との別れを惜しむ内容に変化していることを指摘したうえで、有名な和漢の詞章を取り入れながら言語の表象機能を何層にも膨らませていく能の作文の特徴について解説を行った。「小学生に能の特徴をわかりやすく伝える」という目標を掲げ、学生同士が意見交換し、授業内容を改善していく作業は、何よりも学生自身の能楽への知識・関心を増大させる効果があったと考える。

表1 羽衣普及活動の実績と主な反響

1	2015年3月	『羽衣』第一版刊行（非売品・250部）。監修・山階彌右衛門、本文・鈴木さやか、絵・なかおまきこ
2	2015年4月	「羽衣つたえ隊」（第一期生）結成
3	2015年5月	「羽衣」絵本をダイヤモンドプリンセス号に寄贈
4	同	社会人による、大雄学園青島こども園での絵本読み聞かせ
5	2015年6月	「羽衣」絵本制作に対し、静岡商工会議所静岡伝統芸能振興会より、奨励金授与
6	同	6月10日付静岡新聞にて「羽衣つたえ隊」の活動が紹介される
7	同	牧之原私立坂部小学校より、絵本の感想の送付
8	同	6月23日付産経新聞にて「羽衣つたえ隊」の活動が紹介される
9	同	社会人による、藤枝私立南高洲小学校での絵本読み聞かせ
10	2015年7月	社会人による、藤枝市立藤枝中央小学校での絵本読み聞かせ
11	同	静岡私立児童館「ウィンバル」にて絵本読み聞かせ
12	2015年7月	FMしみずにて、羽衣つたえ隊の活動を紹介
13	2015年8月	静岡県立大学「県大ツアー」にて、絵本読み聞かせ
14	同	8月12日付静岡新聞にて「県大ツアー」における読み聞かせの様子が紹介される
15	2015年9月	SHIMIZU こどもアートプロジェクトにて絵本読み聞かせ
16	2015年10月	静岡県文化財団（グランシップ）アウトリーチ事業との連携事業で、静岡市立駒形小学校にて「羽衣」絵本読み聞かせ
17	2015年11月	『羽衣』第二版刊行（市販品・1400部）。監修・山階彌右衛門、本文・鈴木さやか、絵・なかおまきこ
18	同	静岡市教育委員会を通じ、「羽衣」絵本が静岡市内の全小学校・こども園・幼稚園に配布される

19	同	11月12日付静岡新聞・中日新聞にて、「羽衣」絵本が市内の全小学校・こども園・幼稚園に配布される旨が紹介される
20	同	「全国商工会議所観光振興大会2015in しずおか」にて、「羽衣」絵本100冊が参加者への土産として活用される
21	2015年12月	静岡県文化財団（グランシップ）アウトリーチ事業との連携事業で、静岡市立久能小学校にて「羽衣」絵本読み聞かせ
22	同	英語版「羽衣」絵本刊行
23	2016年1月	「三保松原学講座」において、「羽衣」の講義を行う
24	同	中国語版「羽衣」絵本刊行
25	同	韓国語版「羽衣」絵本刊行
26	2016年2月	2月7日付静岡新聞にて、英語版「羽衣」絵本の記事が掲載
27	2016年10月	静岡市役所文化財課が「羽衣」絵本を原作としたアニメーションを作成、三保の情報施設「みほナビ」にて常時放映
28	同	静岡市役所文化財課が「羽衣」絵本を原作としたアニメーションDVDを作成、静岡市の全小学校に配布
29	同	フランス語版「羽衣」刊行
30	同	「羽衣」に縁の深い舞踏家エレーヌ・ジュグラリス生誕100年を記念し、フランス語版「羽衣」絵本を駐日フランス大使に贈呈
31	同	フランス船籍「ロストラル」の清水港入港時に、清水区副区長より船長へフランス語版「羽衣」絵本贈呈
32	2016年12月	静岡市役所 MICE・国際課より、一般財団法人 自治体国際化協会（クレア）のニューヨーク支部幹部10名へ英語版「羽衣」絵本贈呈
33	2017年4月	羽衣つたえ隊（第二期生）結成
34	同	静岡市清水港にて英語版絵本読み聞かせ
35	2017年5月	静岡市清水港にて英語版絵本読み聞かせ
36	同	フランス語版「羽衣」絵本がフランスメディアファミトリップにて活用される

また、4・7・9・10の教育機関および社会人による活動の広がりについても言及しておきたい。7においては、絵本を寄贈した牧之原市立坂部小学校において、4年生の担任であった三浦孝教諭がクラスのこどもたちを対象としたアンケートを作成・実施し稿者までご送付くださった。また4・9・10では、藤枝市で小学校校長を務められた長谷川浅生氏が、藤枝市のこども園・小学校にて読み聞かせを実施し、終了後にこどもたちが書いた感想を稿者にお寄せくださった（アンケート・感想については、「IV「羽衣」絵本を用いた教育活動の成果と課題①」にて取り上げる）。このような、教員あるいは教員経験者の熱意と行動力から稿者たちが学ぶことは大きく、そのことは「羽衣つたえ隊」ブログにおける学生のコメントにも見て取れる<sup>注30</sup>。いまはまだ協力の輪はごく小さいものだが、上記の事例は「羽衣」普及活動が将来的には大学の枠を超えて広く市民によって担われる可能性を示しているといえよう。

## 能「羽衣」普及活動の成果と課題

今回取り上げた市教育委員会や団体、一般財団法人、市民有志との連携の事例は、地域に根付いた「物語」は、その地域に住む人々の愛郷心を高め、行動を引き出す効果があることを示している。これは、能「羽衣」のみならず、各自治体のある地域に伝わる物語をいかに地域資源として役立てていくかを考えるうえでひとつのモデルケースになるのではなかろうか。

## IV 「羽衣」絵本を用いた教育活動の成果と課題①（アンケート・感想）

この節では、稿者が制作・実施したアンケート、ならびにⅢでとりあげた教育現場におけるアンケート・感想の結果をまとめ、現時点までの「羽衣」絵本を用いた教育活動がどのような成果を上げ、またどのような課題を持つのかを見ていく。

## IV-1 「羽衣」絵本についての印象調査

まず、2015年4-10月において、稿者が10~80代140名を対象に行った「羽衣」絵本についての印象調査の結果を見ていきたい。本調査は、絵本を用いた普及活動に先立ち、①「羽衣」の話が社会的にどの程度認知されているのか②「羽衣」の絵本には能「羽衣」や舞台となった三保への興味を増大させる効果があるか③読み手がどの場面に興味を感じるかを調べるために行ったもので、調査方法としては、授業やゼミの時間において学生に絵本を読んでもらい、読了後にアンケート用紙に記入してもらう方法と、県内外の協力者に絵本とアンケート用紙を送付し、記入後返送してもらう方法の2種類を採用した。質問は8題、1では絵本の中で最も気に入った場面を自由記入で回答してもらい、2では絵本を読む前に能「羽衣」のあらすじを知っていたかを尋ねた。3では、2で「はい」と回答した人に対し、絵本が能「羽衣」の世界観を伝えているか否かを尋ね、4では3で「いいえ」と答えた人に対し、どのあたりが能「羽衣」の世界観と異なっているかを尋ねた。5では、2で「いいえ」と回答した人に対し、絵本を読むことが能「羽衣」への興味につながったか否かを尋ねた。6では絵本を読んだ感想を自由に記入してもらい、7では、能の演目についての知識を有する人のみを対象に、今後絵本化してほしい能の演目を尋ねた。また、8では、「さしつかえなければ」という条件つきで、①性別②年代③住所（県内在住か県外在住か）を尋ねた。制限時間は設けなかったが、稿者の授業で行ったアンケートでは、ほぼすべての参加者が10分以内に回答を終了していた。調査参加者の各年代の人数は以下のとおりである。

10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	無回答	計
37	46	13	10	14	6	5	3	6	140

以下、質問内容のうち、今回は1～5を取り上げ、その結果を見ていく。

1、「羽衣」絵本の中で、一番気に入った場面はどこですか。〔 〕にご記入ください。(例:「白竜が改心して羽衣を返すところ」「天女が帰るシーン」など)

この問いでは、一番気に入った場面を挙げてもらうことで、こちらが「伝えるべき主題」と定めた3点、①天の世界の清らかさ②天の世界への憧れ③三保松原の景色の素晴らしさと、実際の読者の心に残る内容とに乖離があるか否かを確かめることを目的とした。気に入ったページ数を挙げてもらう形式では、場面のどの部分が気に入っているのか具体的な内容がわからないため、あえて自由に記入してもらう形式を採用した。自由記入の内容がどの場面にあたるかを場面①～⑮に置き換え、場面ごとの回答者数をまとめたのが次の表である。複数回答を許容したため、回答総数は参加者数140名に対し155となっている。

場面	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	無回答	その他
人数	1	3	2	2	5	2	4	6	32	6	23	26	18	10	13	3	2

上記の結果から、「天の世界の清らかさ」を表す場面として仮に設定した場面⑨(天女が「うそをつくのは人間だけです。天にうそはありません」と白竜に教え諭す)を挙げた人が32名でもっとも多く(回答者数の約22.86%)、ついで「日本人の天に対する憧れ(に込める形で天女が語った天の世界)」を表す場面⑩+場面⑪を挙げた人が29名(回答者数の20.71%)であった。また、「三保の景色の素晴らしさ」として、夕日に染まる富士山を描いた場面⑫を挙げた人が26名(回答者数の18.57%)いた。これらの結果を見る限り、絵本を通じて稿者ならびに普及活動団体(羽衣つたえ隊)が読み手に伝えたいテーマと、読み手が絵本から受ける印象には大きな乖離はないといえよう。

2、この絵本は、能「羽衣」の話をもとに作られたものです。絵本を読む前に、能「羽衣」のあらすじをご存じでしたか?

この問いに対する回答は、「はい」が54名(38.57%)、「いいえ」が86名(61.43%)であった。年代別の回答の分布は以下の通りである。

年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	年代無回答	計
はい	8	17	9	2	8	4	3	2	1	54
いいえ	29	29	4	8	6	2	2	1	5	86

## 能「羽衣」普及活動の成果と課題

この表を見ると、年代ごとに回答者数が大きく異なるため単純な比較はできないものの、概ね10～40代の比較的若い世代では能「羽衣」のあらすじを知らない人が多く、50～80代の比較的高年齢層ではあらすじを知っている人が多いことがわかる。その中で注目すべきは、30代の「はい」(69.23%)「いいえ」(30.77%)の分布である。拙稿<sup>注4</sup>で紹介したとおり、「羽衣」絵本には稿者が制作した絵本に先行する作品<sup>注5</sup>があり、その作者である遠藤まゆみ氏によれば、絵本を制作した当初(1993年)、各小学校等に絵本を配布し、能「羽衣」のPR活動を行ったという。1993年に小学生(6～12歳)であった人が現在30代になっていることを考えると、30代において能「羽衣」のあらすじを知っている人の割合が多い原因が、90年代の遠藤氏のPR活動の成果であるならば、絵本による能「羽衣」普及活動の有効性を裏付ける証拠となるであろう。今後はこの仮説をもとに、子どもの頃静岡市に在住していた30代への聞き取り調査を進めていきたい。

### 3、2で「はい」と答えた方にお聞きします。絵本は、能「羽衣」の世界観を十分に表していると感じましたか？

この問いに対する回答は、「はい」が45名(84.91%)、「いいえ」が2名(3.77%)、「どちらともいえない」が6名(11.32%)で、約85%の人がこの絵本が能の世界観を十分に表していると判断していることがわかった。ただし、3で「いいえ」と答えた方にお聞きします。原作である能「羽衣」と絵本とを比べて、どの点が異なると感じましたか？に回答した2名の答えは、「白竜のイメージが自分の中の白竜とかけ離れていたの、違う物語として読みました。」「白竜に最初に天女が声を掛けるシーンで、天女が服をしっかりと着ているところ。宝石を降らせるシーンもパステル調でイメージと違った」とあり、能「羽衣」の愛好者で、すでに能「羽衣」についての確たるイメージを持っている人は、本文と絵でイメージを限定する絵本に対し否定的な感情を持つ可能性があることがわかった。能「羽衣」を普及させる、という目的に照らして考えるならば、絵本はあくまでも能「羽衣」への興味を持つためのきっかけ、入り口の役目を果たすものととらえ、絵本の鑑賞が最終的に原典の講読、および舞台上の「羽衣」の鑑賞へとつながっていく仕組みづくりを工夫しなければならないだろう。

### 5、2で「いいえ」と答えた方にお聞きします。絵本を読んで、能「羽衣」に興味を持ちましたか？

この問いに対する回答は、「①大変興味を持った」が19名(22.09%)、「②少し興味を持った」が60名(69.77%)、「③どちらともいえない」が(8.14%)、「④あまり興味を持たなかった」「⑤まったく興味を持たなかった」がそれぞれ0%で、①②を合わせると、絵本を読んで能「羽衣」に何らかの興味を持った人は約92%にのぼった。これらの数値を見る限り、能「羽衣」の普及に絵本を用いることには一定の効果が認めら

れるといえるだろう。

#### IV-2 牧之原市立小学校における「羽衣」絵本についての意識調査

次に、牧之原市立坂部小学校の4年生を対象とした意識調査について取り上げる。この調査は、Ⅲでも紹介したように、2015年6月、同校教諭の三浦孝氏が4年生15名に読み聞かせを行い、その後氏の作成したアンケート（質問1～4）に子どもたちが記入するという形式で行われた。アンケートは氏が独自に作成したものだが、質問内容がIV-1で見た稿者のアンケートと重複する部分があるため、結果を比較しながら見ていきたい。

まず、質問1 絵本『羽衣（はごろも）』はおもしろかったですか。に対する回答は、「1 おもしろかった」=11名（73.33%）、「2 まあまあおもしろかった」=3名（20.00%）、「3 あまりおもしろくなかった」=1名（6.67%）、「おもしろくなかった」=0名（0.00%）であり、なんらかの面白さを感じた子どもが93.33%いたことがわかる。

次に、質問2 羽衣という物語を知っていましたか。に対する回答は、「1 知っていた」=4名（26.67%）、「2 知らなかった」=11名（73.33%）で、IV-1の問い2に対する10代の回答の分布（「知っていた」21.62%、「知らなかった」78.37%）と似通った分布になっている。

質問3 昔から日本に伝わる能（のう）というげきのようなものに、この羽衣の話があります。そのげき（少しむずかしい）を見てみたいですか。に対する回答は、「1 見てみたい」=4名（26.67%）、「2 少し見てみたい」=9名（60.00%）、「3 あまり見てみたくない」=2名（13.33%）、「4 見たくない」=0名（0.00%）で、1と2を合わせ86.67%の子どもが（絵本を読んだ時点では）、能という劇になんらかの興味を持ったことがわかる。絵本によって促進される能への興味を一過性のものにしないためには、絵本を用いて授業をする際にパワーポイント等で能面や装束、囃子の画像を見せる、謡いや舞の一部を見せるなど、補助的な資料を活用する必要があるだろう。

質問4 どの場面が一番よかったですか。また、それはなぜですか。の問いに対する子どもたちの回答（自由記入方式）をそれぞれ該当する場面に置き換えると（複数回答あり）、後半の場面に回答が集中し、場面⑨=8名（回答者数の53.33%）、場面⑩=1名（回答者数の6.67%）、場面⑪=1名（回答者数の6.67%）、場面⑫=1名（回答者数の6.67%）、場面⑬=1名（回答者数の6.67%）、場面⑭=3名（20.00%）、場面⑮=4名という結果になった。

IV-1の大学生～80代を対象とした調査結果と比べると、場面⑨を挙げた割合が高く、全体の半数以上の子どもがこの場面を挙げていることがわかる。理由については、

- ・白りゅう（原文ママ）が天女に羽衣を返した所がいいと思った。理由はずっと返さなかったけど返してあげたからやさしいなと思った。
- ・白竜が天女にはごろもをわたすところ。さい初は、いじわるではごろもをわたさな

## 能「羽衣」普及活動の成果と課題

かったけど天女が悲しがっていたからわたしてあげたからやさしくなったから。と、白竜の心の変化に着目し、白竜の改心を喜ぶ声が目立った。大学生～80代を対象とした意識調査では、最も気に入った場面として場面⑨を選ぶ際に、「うそをつくの人間だけです。天にうそはありません」という天女の言葉」と記述しているものが多く、天女の言葉に象徴される、天の世界の清らかさに焦点をあてているものが目立った。それに対し、こどもたちは白竜に注目してこの物語を読み、白竜が最終的に衣を返してあげる、そのやさしさゆえにこの場面を好んでいることが見て取れる。

## IV-3 藤枝市立小学校における「羽衣」絵本についての意識調査

IV-2で見られた、場面⑨にこどもたちの関心が集中する傾向は、他の教育現場でも同様に見られるものであろうか。その問題提起を踏まえ、次に藤枝市立高洲南小学校における「羽衣」絵本についての意識調査を紹介する。この調査は、IIIでも紹介したとおり、藤枝市の小学校で長年教諭を務められた長谷川浅生氏が、2015年6月に同校の5年生27名に読み聞かせを実施し、後日同校図書主任の松永ひとみ氏がこどもたちに読み聞かせを聞いての感想を書かせるという形で行われた。

27名の感想に対し、場面⑨を取り上げているこどもは7名(25.93%)と、IV-2に比べると突出して多いわけではないが、これはIV-2の調査が「どの場面が一番よかったですか」という限定的な質問形式で答えを求めているのに対し、本節の調査は自由に感想を書く形式で行われていることによるであろう。感想の一部を引用すると、

- ・漁師の人がすごくいじわるで、びっくりしました。でも、かえしたとき、いいことがあったので、人にやさしくしたらいいと思いました。
- ・漁師が天女に羽衣を返さなかったからギクッとなったけど、最後は返してあげたからホッとしました。うらぎられそうと思っていた漁師は、羽衣を返すと美しいおどりをおどってもらいよかったと思ったはずだから、ぼくも人はうらぎりたくないです。
- ・今日の羽衣で男の人がやさしくなったから人にはぜったいやさしくしてあげるといことがわかりました。
- ・漁師が天漁(ママ)に羽衣を返さかった(ママ)けどさいごには、返すっていう話がよかった

など、やはり白竜の心の変化に着目し、そこから「人にやさしくする大切さ」を学ぶという回答が目立った。

以上、IV-1,2,3の結果をまとめると、①能「羽衣」の物語は、物語の舞台がある静岡市にあっても広く知られているとはいいがたい(現状)②「羽衣」絵本は能「羽

衣」の世界観を反映したものとなっている（教材としての有効性）③「羽衣」絵本を用いた活動をすることで能「羽衣」への興味を増大させることができる（成果）④「羽衣」絵本を読むことで、「天の世界の清らかさ」「天の世界への憧れ」「三保の景色の美しさ」などを学ぶことができる（成果）ことが明らかになった。他方、こどもたちは当初の稿者の予想と異なり、天女や天の世界よりも白竜に注目する傾向があることがわかった。白竜の心の変化から、「人にやさしくすることの大切さ」や「葛藤を超えて改心し得る人間の可能性」を学ぶことにも大きな意義があり、それは能「羽衣」のテーマにも合致するものではあるが、併せて絵本に描かれる天の世界の清らかさや三保の景色の美しさにも注目してもらえよう、授業の題材として絵本を活用する場合には工夫が必要であろう。

## V 「羽衣」絵本を用いた教育活動の成果と課題②（絵本と原典の比較から）

本章では、IIの図にあげた「本活動の目的・構想」の中にある、「原典の能「羽衣」読解及び能鑑賞による能の世界観・日本思想への理解の深化」に焦点をあてた活動について紹介する。2017年6月、稿者と羽衣つたえ隊学生メンバー9名は「羽衣」絵本とその原典となる謡曲『羽衣』の読み合わせ会を行った。読み合わせ会にあたっては、学生に事前に「羽衣」絵本と能「羽衣」のテキストの両方を読んできてもらい、会当日に「羽衣」絵本がA能「羽衣」の内容・イメージをよく表し得ていると思う箇所、B能「羽衣」とは内容・イメージが異なると思う箇所、をそれぞれ挙げてもらうという方法をとった。以下、まずは学生から出た主な意見を場面順に従って列挙する（学生の口頭での発言を、稿者が言葉を補って記述している）。なお、能「羽衣」のテキストとしては、新編日本古典文学全集58『謡曲集①』（小山弘志、佐藤健一郎校注・訳、1997年、小学館）を用いた。以下の原典の引用もすべて同書による。

### A 能「羽衣」の内容・イメージをよく表し得ていると思う箇所

- ① 場面②の、「空から色とりどりの花が舞いちり、ふしぎな音色が聞こえ、ほんのりとあまいかおりがただよってきました」および花と波状の線を描いた絵が、原典の「虚空に花降り音楽聞え、霊香四方に薫ず。」に見られる、視覚・聴覚・嗅覚にわたる奇瑞をよく表している。
- ② 場面④では、天女の台詞→白竜の台詞→天女の台詞→白竜の台詞と、天女と白竜が交互に言葉を発しリズムよく場面が展開するが、原典における当該箇所もシテとワキの比較的短い台詞の掛け合いで場面が進行しており、原典のイメージをよく反映している。

## 能「羽衣」普及活動の成果と課題

- ③ 白竜が衣を返してくれないと知り天女が嘆く場面⑤において、原典は「せん方も、涙の露の玉蔓、かざしの花もしをしをと」という表現で天女の嘆きを表している。その箇所を原典と絵本で比較すると、原典の「涙の露」と「花の露の玉」との掛詞が、天女の涙が玉となってこぼれ落ちる絵によってよく表現されている。また、「玉蔓」という「かざしの序詞を用いて「涙の露の玉」と「かざしの花」がともに「しをしをと」こぼれ落ちる様が重なり合って表現されているが、絵本では涙の露と天女のかざしの花がこぼれ落ちる様子を並列的に示しており、原典の言葉による涙→露→玉→玉蔓→かざし、の連想が、絵本では絵によってなされているところが面白い。
- ④ 場面⑩で、天女が天の世界について話し始める場面について、大きく描かれた天女の手と画面の左右を分断して描かれる羽衣によって、「天女と白竜が対話している世界」から「天女が語る天の世界」への場面転換が鮮やかになされており、これは能「羽衣」のシテのワキの対話から、シテが羽衣を身につけ（能の用語で「物着」という）舞を舞う場面へと転換していくさまをよく表している。

## B 能「羽衣」とは内容・イメージが異なると思う箇所

- ① 絵本においては、場面②およびその後の場面すべてにおいて白竜が一人で天女と対峙しているが、原典では舞台冒頭においてワキ（白竜）とワキツレ（白竜の仲間の漁夫）が登場しており、またワキ・ワキツレの台詞の中に「浦人騒ぐ波路かな」「釣人多き小舟かな」という詞章があることから、港町のにぎわいを感じさせる。天女の姿は白竜以外の大勢の漁夫も目にしていたのではないか。
- ② 絵本の場面①の景色の描写は「空ももうすっかり春の色」「おだやかな朝の風」「広々とした海と空」といった単純なものだが、原典では「春の景色松原の、波立ちつづく朝霞、月も残りの天の原」「吹くものどけき朝風の、松は常盤の声ぞかし、波は音なき朝風」に」と、掛詞を多用した表現で朝霞や残月、松を風が吹き渡る音、音もなくおだやかに打ち寄せる波が描かれており、日本的な美を感じる。
- ③ 場面④で、天女が「それは天の羽衣で、人間がさわってはいけないものです」という台詞があるが、原典では「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に与ふべき物にあらず。」となっており、「さわってはいけない」と「簡単に人間にあげてよいものではない」とでは意味合いが異なるのではないか。
- ④ 場面⑤の白竜が衣を返さない場面、場面⑧の白竜が天女を疑う場面などから、絵本を読んだときには白竜がとても意地悪な人間に思えるが、原典を読んだときに

はそのようなイメージは抱かなかった。

- ⑤ 場面⑥で、空をゆく雁の声を聴いた天女が「あの声は何かしら。なつかしい極楽の鳥ににているけれど。わたしもあの鳥のようにふるさとへ帰りたい。」と言っているが、原典では「迦陵頻伽の馴れ馴れし、迦陵頻伽の馴れ馴れし、声今さらにはつかなる、雁の帰り行く、天路を聞けばなつかしや、千鳥鷗の沖つ波、行くか帰るか春風の、空に吹くまでなつかしや、空に吹くまでなつかしや」と「なつかしや」をくり返しており、帰ることを諦め、そのうえで馴れ親しんでいた天の世界を恋しく思っている印象を受けた。
- ⑥ 場面⑨で、天女を疑う白竜に対し天女が戒める場面で、天女が「うそをつくのは人間だけです。天にうそはありません。」というが、原典では「いや疑ひは人間にあり、天に偽りなきものを。」となっている。「うそ」と「疑い」では意味合いが異なるのではないか。
- ⑦ 全体を通して、原典（あるいは能の舞台）では主人公は明らかにシテの天女であるが、絵本では白竜が主人公に見える。

ここに挙げた指摘はすべて、能および日本思想の特徴を考察するうえで貴重なヒントとなり得るものであるが、今回は特にB-①⑦を取り上げたい。まず、①については、能「羽衣」におけるワキ・ワキツレの役割を再考する重要な指摘となっている。ワキの説明として、試みに「能・狂言事典」をみると、

能の役種。シテの相手役。脇とも書く。僧侶、神職、朝臣、武士などの役柄が多く、かならず男性であり、現実の生きている人間の役なので、面をつけることはない。たとえば《井筒》の旅僧、《羽衣》の漁夫、《船弁慶》の弁慶などである。ワキの同僚、または従者として出る役はワキツレと呼ぶ。

とあり、能「羽衣」では、ワキの白竜と並んで仲間の漁夫（ワキツレ）が2人登場するのが通常の演出である。上記の説明の例に挙げられている《井筒》の場合、ワキの旅僧は荒れ果てた在原寺で有常女という亡霊（シテ）に対峙するのであり、その時には「シテの業平への密やかな思いを受け止めるのが旅僧ただ一人である」という演出に大きな意味があると思われる。それと比較したとき、舞台である三保の情景を観客に示す場面で、ワキの他にワキツレを複数出すのは、物語の最後に天女から「七宝」の恵みを受けたのが、白竜という個人ではなく、「国土にこれ（七宝）を施し給ふ」とあるように地上そのもの、ひいてはそこに住む衆生そのものであることを観客に感

## 能「羽衣」普及活動の成果と課題

じさせる演出なのではあるまいか。この部分の指摘は稿者にとっても新鮮で、絵本化するにあたり登場人物・構成を単純化したがために描き得なかった部分を補足してくれた指摘であった。

実は、この指摘には後日談がある。読み合わせ会に参加した学生が、なぜ原典においては（物語の展開に必要とは思えない）ワキツレがいるのかを明らかにするため、観世流能楽師の八田達弥氏に上記の質問を投げかけ、メールにて回答をいただいたのである<sup>注6</sup>。氏はその回答の中で、「井筒」と「羽衣」を比較し、「井筒」の冒頭のシーンではワキが一人で語ることによって秋の寂しさを表すのに対し、「羽衣」では明るい春の情景、大勢の漁師がにぎやかに漁を行う様子を観客に印象づけるためにワキツレを出すのだ、という見解を示された。また、登場から道行まではワキとワキツレは舞台上で向き合って謡うが、その後はワキツレは脇座に着座、ワキはシテ柱のところまで謡うという形で別行動を取り、その中でワキは立木の作物を見て羽衣を発見することから、ワキの白竜が羽衣を見つけ、天女と対峙するのは仲間の漁師と別れた後なのであろう、という指摘もいただいた。八田氏のご教示はメールを通じて羽衣普及活動に参加している学生たち（羽衣つたえ隊）全員に共有され、能におけるワキ・ワキツレの役割を再考する貴重な体験となった。学生の行動とそこから得られた知見は、絵本との比較作業の中で古典を読み解くという作業が、学生の能動的な学習を引き出すきっかけになり得ることを示す、きわめて優れた事例であると考えられる。

また、⑦の「絵本においてはワキ（白竜）が主人公に見える」という指摘は、IV-2,3で見た、こどもたちの感想の傾向と関連づけられるものである。実際の舞台では、ワキの白竜は対話を終えると脇座に着座し、天女の約25分にわたる舞をひたすら見つめる役に徹するため、舞台を見て「この物語の主役は白竜だ」と捉える観客はまづいないと思われる。他方、稿者が授業において「羽衣」絵本を原作とするアニメーションを見せた後、「この物語の主人公は、どのような試練を経て、どのような勝利を手に入れますか」という質問を行った際、58名中36名の学生が白竜を主人公と設定したうえで回答を作成した。これは、能「羽衣」の中にも見て取れる白竜の驚き・意固地さ・同情・疑い・反省・畏敬の念といった感情の変化が、絵本においては白竜の豊かな表情によって強調されていることが一因であると思われる。

しかし、絵本における白竜の存在の大きさは、決して能「羽衣」におけるワキの存在のあり方から大きく外れるものではない。能のワキは通常いわれるところの「脇役」とは意味合いが異なり、シテという異界の存在と出会い、異界のありようをわれわれ観客に目に見える形で示すという大きな役割を担っている<sup>注7</sup>。その意味で、絵本と原典の比較を通してワキの持つイメージの違いを考察することは、舞台においてシテの陰に隠れ、注目されることのないワキの存在意義を改めて捉え直すきっかけとなるであろう。

ここまで、絵本と原典とを比較した際の学生の意見について見てきたが、本研究では、A、Bに見られる学生の気づきとその後の能「羽衣」についての深い学び直しこそが、IIの目的で述べた、「つたえ手である学生自身の学びと成長」の顕著な事例と捉えている。いま比較材料となる正確な資料は持ち合わせていないが、稿者が数年前、同じ能「羽衣」を題材に同時間(90分)授業を行い、原典を読んだうえで疑問点を挙げてもらった際には、このような多岐にわたる指摘は学生の間から出ることはなかった。今回の事例は、「絵本を用いた古典教育」における、以下の学習効果を証拠立てるものになるだろう。

- ① 絵本という親しみやすい媒体によって「羽衣」の物語を学び、その後に原典と比較するという形をとることで、絵本の絵や本文の持つイメージに助けられながら、原典の特徴や魅力を検討することができる。
- ② 学生自身が絵本のつたえ手となるという意識を持って読むことで、原典の主体的・積極的な読みが可能となる。

特に②については、学生が天女の台詞をどのような調子で読めばよいかを検討する際に、原典のシテ(天女)の台詞からヒントを読み取ろうとしている姿にも、絵本を媒介として原典を学んでいくことの有効性を感じることができた。「原典における天女の気持ちを知りたい、もしくはテーマがなんであるかを知りたい」という学生の意欲は、そこに「そこから得られた知見を生かして、自らの活動の質を高めたい」という動機が加わるとき、単に授業で「羽衣」の講義を受動的に受けるときとは比較にならないほどの高まりを見せる。これは、「羽衣」に限らず、古典文学を学ぶ場において、アクティブ・ラーニングが効果的であるということを示す一つの証左になるであろう。

## VI おわりに(今後の展望)

ここまで、2015年度～現在にいたる、稿者と学生、協力者による絵本を用いた能「羽衣」普及活動の成果と課題を見てきた。ここで活動の成果と課題を改めてまとめると、まず成果としては次の4点が挙げられる。

- ① 「羽衣」絵本の日本語版・英語版・フランス語版・中国語版・韓国語版を制作し、日本語版「羽衣」絵本および「羽衣」絵本を原作とするアニメーションDVDが静岡市の小学校をはじめとする教育機関・保育施設に配布されたことで、地域の知的文化財・「羽衣」を題材とする長期的総合教育モデルを構築する基盤づくりができた。
- ② 小学生、および10～80代を対象に行った意識調査により、「羽衣」絵本が能「羽衣」の内容を十分に伝える教材であることが確認され、併せて「羽衣」絵本が能

## 能「羽衣」普及活動の成果と課題

「羽衣」への興味を増大させる効果があることが明らかになった。

- ③ 教員および教員経験者、あるいは公的機関との連携を通じて、子どもたちへの能「羽衣」の普及活動の規模が大幅に拡大するとともに、つたえ手同士が「羽衣」の物語を紐帯とするゆるやかなつながりを形成し、「物語を介した地域づくり」への可能性を開くことができた。
- ④ つたえ手である学生が、絵本の読み聞かせを念頭において原典の講読を行う、子どもたちに能「羽衣」の授業を行う、などの能動的な学びを行うことで、日本の文化を適切に発信していく人材の育成を進めることができた。

他方、課題については、①「羽衣」絵本は、絵本という媒体の制約上、能「羽衣」の世界観をすべて伝えているわけではないこと、②「羽衣」絵本は、これも絵本という媒体の性質上、実際の舞台よりも白竜がよりクローズアップされる傾向がある、などの課題が明らかになった。これらの成果と課題を踏まえ、今後は能「羽衣」の主題や魅力を再検討する作業を継続して行いつつ、「羽衣」絵本が能「羽衣」の特質を表し得ている箇所、表し得ない箇所を考察したうえで、適宜補足説明を加えながら普及活動を行っていく。また、「羽衣」絵本のさらなる外国語化を進めると同時に、地域の教育機関と連携し、中学校・高等学校における英語版「羽衣」絵本を用いた英語教育モデルの構築を行っていくことを目指していきたい。

附記 本研究は、平成26年度、平成27年度教員特別研究推進費（テーマ：「小学校国語教材としての「羽衣」絵本の作成—能「羽衣」を軸とした長期的総合教育モデルの構築を目指して—」「地元の文化財・「羽衣」が持つ教育的・経済的価値の再評価—「羽衣」絵本の普及活動を軸として—」）および平成27年度教育研究（テーマ：「絵本による能「羽衣」普及活動—地元の文化財「羽衣」の教育的・経済的価値の再評価を目指して—」）、平成27年度地（知）の拠点整備事業 地域を志向した研究費（テーマ：静岡市観光事業の活性化を目指した、「羽衣」絵本翻訳プロジェクト—地域の文化財をクールジャパン・アイテムにするための産官学連携事業—）、公益社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアム学術研究助成（テーマ：「観光立県・静岡の実現に向けて—外国人観光客のニーズ把握と新たな観光資源の開発—」）の交付を受けて行われたものである。ご協力いただいた一人一人のお名前を挙げることはかなわないが、本稿にお名前を挙げた方々はもちろんのこと、今回紙面の都合上言及できなかった多くの公的機関、財団、市民の方々、共同研究を行ってくださった方々、そしてともに普及活動に励んでくれる学生たちの存在がなければ、この研究活動は成り立たなかった。ここに記して、感謝の意を表したい。

## 注

- 1 「静岡県の人口減少対策への提言（案）」、人口減少問題に関する有識者会議、

2016年12月

- 2 2017年4月7日付日本経済新聞。
- 3 稿者と静岡県立大学学生有志による能「羽衣普及団体（団体名：羽衣つたえ隊）は、2015年4月に「静岡県立大学羽衣つたえ隊」というブログを開設し、活動や反響について情報を発信している。（<https://ameblo.jp/hagoromohukyu/>）2017年6月16日付の記事で、長谷川氏の読み聞かせ活動を参観した学生が、「身近に同じ気持ちをもって活動できる社会人の方がいることは、私たち学生にとって、とても貴重な経験ですし、大切にしたい繋がりだと感じました。機会があれば、またお話を伺いたいです！」と感想を記している。
- 4 鈴木さやか「能を題材とした研究ノート—絵本を用いた古典教育の可能性を探る I—」、『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）第13巻第1号、2014年9月
- 5 『羽衣』金田一春彦監修、村瀬登茂三画、遠藤まゆみ文、1993年、羽衣伝説を考える会編集・発行。
- 6 同学生は小学生の頃「こども能」の実演で舞台に立ったことがあり、その際の指導者であった八田氏といまも交流があるとのことである。
- 7 異界と出会う存在としてのワキの役割については、安田登『ワキから見る能世界』（NHK 出版、2006年）に詳しい。